



**Discourse on surrogacy by feminism:
their collusion with conservative forces.**

代理出産に関するフェミニズムの言説
～保守勢力との結託～

Interviewee

Dr. Pablo Pérez Navarro

Q. 研究者としてのバックグラウンド、専門領域について教えてください。代理出産に関心を持ったきっかけは何でしょうか？

哲学のバックグラウンドを持っている。ポルトガルのコインブラ大学の社会研究センターのプロジェクトがきっかけで代理出産に関心を持つようになった。プロジェクトでは社会学的な方法を用いて、インタビューとフィールドワークを実施した。自分は、これまでこうした方法の研究に取り組んだことがなかった。このプロジェクトで、自分は、スペインの代理出産を1年間にわたり調査した。米国で代理出産を依頼したスペインのゲイカップルにインタビューをした。この研究は非常に興味深いものだった。この研究で、代理出産の生政治に触れ、(生殖とジェンダー・アイデンティティの観点から) 国家と個人のプライベートな生活との関係について、もっと知りたいという気持ちを持つようになった。

現在は、欧州委員会から資金提供を受けて、ポストドクのためのフェローシップを終えようとしているところ。ジェンダー、親族、生殖の生政治について3年間にわたり、研究してきた。非一夫一婦制の関係性についてフィールドワークを行うため、2年間、ブラジルに拠点を置いてきた。急速に社会文化的変化を遂げている分野と、これらの変化がどのように起こっているかを探求しようとしている。この仕事は、ポルト

ガルでの代理出産を含めて色んなトピックをカバーしている。

Q. どのように調査を実施しましたか。対象者の確保で困難なことはありましたか？ ラポールは築けましたか？

代理出産に関するフィールドワークは、主にスペインで行った。ポルトガルからスペインに渡航し、代理出産を経験したゲイカップルを探した。最初に、スペインのソーシャルメディアを通じて電話をかけ、LGBTの活動家グループに連絡を取った。その一部は、特にゲイやレズビアン家族や両親と連携していた。必死に努力したにもかかわらず、この方法でなかなか参加者を募集することはできなかった。しばらくの間、うまく行かないのではないかと心配だった。幸いなことに、マドリッドでは代理出産エージェントとスペイン人の親をつなぐ会社が主催するイベントがあり、このイベントで、ゲイの父親に出会った。彼は学界で働き、ゲイの活動家でもあった。彼は故郷でのインタビューに同意し、参加してくれ、また他のゲイの親を紹介してくれた。

スペインで色々なプロジェクトで実施したいろんなフィールドワークの中で、この研究はまさに研究対象にアクセスするのが最も難しかった。しかし、いったん紹介された後は、彼らは最初から最後まで非常にオープンで誠実だった。彼らは、感情たっぷりに、自分たちの経験を語った。ポジティブなものもあれば、あまりポジティブでないものもあった。ゲイカップルの親を見つけるのにもものすごく苦労した後、実際には彼らがどれほど話したがっているかを知って驚いた。彼らは、代理出産へのアクセスを改善したい、社会の変化と政治的変革をもたらすために何かしたいと強く望んでいた。

Q. 代理出産に対する西欧フェミニストの言説について、どのように分析しますか？



自分の学問的基盤は、クィア理論と、それに関連したフェミニズムにある。代理出産についての現在のフェミニストの言説は非常に苛立たしいと感じている。フェミニストが政治的プロセスを混乱させ、女性の生殖の権利と、それ以外のグループの生殖の権利を繋げる機会を失っているように感じている。自分は、スペインのような国々でのセックスワークの犯罪化と生殖権の制限における西洋のフェミニズムと制度的フェミニズムの役割について深く憂慮している。フェミニスト政治が極右の非常に保守的な声と秘かな関係を築き、保守派のジェンダーイデオロギーの政治的大変革に貢献していると感じている。

Q. 売春に関しては、sex workとして認めようという意見も散見されますが、それと比較すると、代理出産について care work /reproductive workとして認めるべきだという意見はそれほど見かけません。なぜでしょうか、どのように考えますか？

「ケアワーク」（再生産の領域）と「セックスワーク」に関する労働の領域が極めて過小評価されているという印象を持っている。私たちの社会は、男性が公共の場で行う社会的生産の分野の仕事を重視する傾向がある。一部の女性が社会生産領域で有給の仕事をする可能性を排除することで、公的領域と私的領域の分割が再活性化し、強化された。それは代理出産の場合にも当てはまる。

一方で、フェミニストのポリティクスは、育児と生殖の仕事を、他の仕事の分野から排除された女性の貢献を評価する仕事として再考し、社会への経済的貢献を強調しようとした。しかし、他の仕事を受けている社会的保護や規制を与え、この分野で働く女性を保護し、環境を改善するためには、この仕事に場所を与えることが必要だったが、それは困難だった。

この問題のフェミニストポリティクスに関する自分の不満は、仕事を仕事として正しく評価する必要があるのに、それをしていないということ。そうしないことによって、社会的再生産の仕事は、もっと脆弱で不安定になっている。

Q. 世界的にみて、代理出産の規制に対して、フェミニストの影響力は強いと考えますか？ 宗教勢力はどうでしょうか？

比較するのは難しい。社会的に言えば、ヨーロッパでは、宗教団体と進歩的フェミニストの立場との間にはシンクロシティがある。たとえば、スペインは現在、左派政党の連立によって統治されている。そこでのフェミニスト運動は強力であり、女性の権利に関して抗議を行い、人々をイベントに動員する力がある。この強い影響を考慮すると、代理出産廃止論者の見方は、代理出産の規制に一定の影響を及ぼしたことは間違いない。一般的に言って、スペインのフェミニスト運動はポジティブで多元的な運動であり、その中には多様な政治的見解がある。しかし、代理出産に関しては廃止論者だ。

フェミニズムは司法の変化に影響を与え、セックスワーク、中絶、代理出産などの分野を管理するさまざまな法律を提案する力を持っている。スペインでは中絶の権利が拡大されているが、代理出産に対しては廃止論を取っており、海外で代理出産を求めることも犯罪化されるだろう。それは、公共圏での代理出産に関する宣伝を禁止し、センサーの役割を果たす。たとえば最近、スペインの高等裁判所では、メキシコで代理出産を依頼した女性が、親としての権利を得るために養子縁組を行う必要があるかどうかについて、判決があった。裁判所は、判決の際、廃止論者のフェミニズムによって提供された議論を引用し、代理出産を、搾取と人身売買の一形態として説明した。それは代理出産のスティグマ化



を正当化するものであり、言語的暴力のレベルに到達している。

Q. 代理出産に反対する先進国のフェミニストの運動は、新興国(例えば、ラテンアメリカ)にも影響を与えていますか？

それについてはよくわからない。国境を越えた影響の最たるものは、ジェンダー・イデオロギーのような、より知られている言説からのもので、例えばそれは、イタリアで始まり、ヨーロッパ全体に広がり、ラテンアメリカでも広まっている。

フェミニスト運動の影響関係はそれほど直接的ではないが、その言説は似かよっている。それらは、1980年代にさかのぼるフェミニスト理論の共通の影響と共通の系図から来たものだ。

Q. インドやタイ、カンボジアなどで商業的代理出産が次々と禁止されました。フェミニズムや人権活動家の影響はありましたか？ ホモフォビアはありましたか？

そうは思わない。禁止のほとんどは、明確な法的枠組みがないまま、国際的な代理出産が行われた結果生じた司法上の問題によるものだと思う。これは、特定の属性の人が親になるのを禁止する、といった、シンプルな解決方法がとられた。インドの場合、代理出産にアクセスする権利を特定のインド人だけに限定する国内法が作られた。

グローバルに言えば、フェミニズムの影響はパラドキシカル。ポルトガルには、フェミニスト運動の影響を受けた代理出産法が新たに制定された。ポルトガルのフェミニストはこの法律の制定に貢献したが、スペインではフェミニストの政治的アジェンダは代理出産に反対している。二国間の共通点は、どちらも性的マイノリティの代理出産へのアクセスを制限していることだ。ポルトガルでは、独身および同性愛者の依頼は禁止されている。基本的な考え方は、

女性同士の助け合いだということ。これは、男性を完全に排除することによって男性から代理出産を依頼する可能性を奪い去り、男性と女性間の権力格差についての政治分析を回避しようとするものである。ポルトガルの憲法では、性別による差別が禁止されている。他の生殖技術と養子縁組へのアクセスは男女平等だから、これはパラドキシカルだ。代理出産は唯一の例外。これは、男女平等の法律の創立に関与したフェミニストの側のアンビバレンスを反映している。

Q. 子宮移植(---ここでは、男性が子宮移植を受けて子を産むこと)はどのように評価できますか？ 男性が子供を産むことは、ゲイカップルの間で現実的な選択肢となりえますか？

現在、その分野の医学の進歩について詳しいことはわからない。しかし、それは生殖領域を規定するジェンダー規範を調べるための思考実験になるだろう。しかし、ほとんどのシスの男性にとって、それがポジティブな可能性を意味するかどうかについて確信がない。

シスの女性が産んだ子供の親になったトランスジェンダーのノンバイナリー女性にインタビューをしたことがある。トランスジェンダーの女性は、自分で子供を出産しなかったが、ホルモンを摂取して子供に母乳を与えた。それは非常に珍しいことだったが、彼女の主治医はそれを手伝った。彼女は、それが比較的簡単なホルモン療法であるにもかかわらず、シスの男性はこれを行う可能性がないだろうと考えた。彼女は、シスの男性は、子供たちに母乳を与えることを要求されることはないのだということにショックを受けていた。これはどこでも起こっていることではないが、男性的な体をめぐる規範性に関連している。自分の子供を男性として出産するという概念は大きな緊張に直面するだろう。その考えにオープンな人もいるだろうが、一般的にそれは多くの抵抗に遭遇するだろう。



Q. 代理出産を依頼したゲイカップルにとって産んだ女性や卵子を提供した女性はどのような存在ですか？

一般的な感覚としては、代理母 (gestational carriers) が彼らの家族の一部になったということ。これは最も頻繁に語られた言説だった。代理母を友人として認識し、長期的な関係を持つだろう。この関係は、子供が生まれるまで、オンラインチャットや、対面のミーティングによって、時間をかけて慎重に作られた。それはまた、一部の人にとっては欲求不満の原因でもあった。彼らは、その関係について理想的なイメージを持っていて、それが期待に沿わないこともあった。これは、将来持つべき関係性についての作られた物語と規範によるもの。代理母とそのような関係を築いていない人にとって、これは欲求不満や喪失感の原因になる可能性がある。

このナラティブはまた、代理母のシンボリックな役割を、母親という人物として復活させるかもしれない。大抵の場合、当事者間には非常に密接な関係があるが、女性の伝統的な役割を再構築するかどうかについてはアンビバレントだ。

Q. 同性カップルが家族を作った場合、どちらか一方としか子供と遺伝的つながりがありません。体細胞から精子や卵子を作るような技術は、同性カップル(ゲイカップル)に需要があると思いますか？ 二人の遺伝子を継いだ子供を作ることは、カップルの親密性を増しますか？

これは間違いなくポジティブな進歩と見なされるだろう。それは特に、依頼親の双方が遺伝的つながりを望んでいる場合。しかしこれは、ゲイの親を代理出産に導く主要な推進力にはならない (つまり、自分の遺伝物質を子供を通して複製したいという願望の技術的翻訳ではない)。代理出産への推進力は、子供を産むための代替手段がないことだ。

どちらが精子を提供するかという葛藤に対処するための、創造的で想像力豊かな方法をカップルが考え出すのを観察した。卵子に受精させる前に精子を混ぜて、どちらの遺伝物質が使われているのかわからなくする人もいる。子供が2人生まれた後も、知りたくないという態度を維持する人もいた。これらの問題には文化的要素がある。

Q. ラテンアメリカ諸国で、生殖補助医療の規制や代理出産の実施に関して、スペインやポルトガルの影響関係は見られますか？

それについてはよくわからない。ブラジルの場合、独自の視点を持っているので、直接的な影響はないように見える。現在、代理母 (gestational carriers) は、依頼親と2親等以内の親族関係でなければならない。これは強い制約だ。これは利他的なモデルだが、独自の組織がある。同時に、ブラジルは同性愛者のカップルが代理出産を依頼することができる、世界でも数少ない国の1つ。それは多くの点で逆説的だ。ブラジルで正式な規制はなく、認可のプロセスについてよく知らないが、現場に関わる人によって作られたガイドラインがある。

Q. スペインのゲイカップルにとって、南米で代理出産などを依頼することにはどのような advantage と disadvantage

(vulnerability/precarious) がありますか？

代理出産を依頼するためにスペインからゲイカップルがメキシコに渡航する場合もあるが、法的な不安があるため、特に人気のある目的地ではない。メキシコ以外では、コロンビアが、ラテンアメリカで随一の潜在的な目的地だといえる。

ほとんどの場合、スペインのゲイカップルの依頼者はアメリカに行く。それは10倍高価だが、はるかに安全だ。



Q. ラテンアメリカ諸国で今後、生殖補助医療について規制が進んでいくと思いますが、どのような方向性に向かっていると思いますか？ ハーモナイゼーションはあるでしょうか？

今の段階では確信が持てない。おそらくポストドク研究の終わりに、何らかの展望を持っていると思う。最近の傾向は、何らかの変化は、さらなる制限に帰結することを示している。メキシコでは、代理出産を禁止するという話がいくつかあったが、これは主に選挙ツールとして使用されている。ジェンダーとセクシュアリティの政治は、近年、極右政治で成功を収めてきたため、同性愛者の生殖を禁止するために代理出産も利用される可能性がある。代理出産が主に異性愛者の親によって使用されているという現実にもかかわらず。フェミニズムは、日常の政治で保守的な勢力に対抗しようとしているときでさえ、悲しいことにこの変化に寄与する力になるだろう。

Q. その他

将来の仕事として、例えばポルトガルとスペインのフェミニスト政治を比較し、現代フェミニズムのヘゲモニーを明らかにしたい。これが代理出産規制の代替案を浮き彫りにし、マイノリティグループ間の連携の構築に貢献することを望んでいる。これは将来、政治の方向を変える可能性がある。

Q. 現在取り組んでいる研究、これからやりたい研究

現在、ポストドクフェローシップの一環として、ポルトガルの代理出産法を調査する予定。数ヶ月前のことだが、数年の議論の末、最終的に裁判所によって法律が承認された。今後2~3年で、それがどのように実装されるかを見るのは興味深い。さまざまなグループ（ゲイの親など）がどのように行動するかを観察するのに熱中している。フェミニスト政治（女性の自律性に焦点を当てている）と代理出産へのアクセスから

除外されているマイノリティグループとの間の緊張を強調することが可能かどうかを知りたい。また、公開討論がどのように進展するか、そしてこれが法的な変革につながるかどうかを知りたい。

(2022年6月)

Dr. Pablo Pérez Navarro [Link](#)

スペインの La Laguna 大学で、ジュディス・バトラーのパフォーマティビティについて研究を行い、PhD を取得。その後、複数の大学でプロジェクト研究に携わる。現在は、下記のプロジェクトでフェローシップをしている。

TRIALOGUES from the South: Emergent Biopolitics of Kinship, Gender and Reproduction, Marie Skłodowska-Curie Individual Global Fellowship (894643). [Link](#)

Pérez Navarro, Pablo (2018) *Surrogacy Wars: Notes for a Radical Theory of the Politics of Reproduction*. *Journal of Homosexuality* 18: 577-599.

Pérez Navarro, Pablo (2017) *On ne naît pas queer: From The Second Sex to Male Pregnancy, in Andrea Duranti and Matteo Tuveri (org.), Yesterday, Today and Tomorrow*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing 327-338.